

教員による 2 年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究

——看護学実習における教授活動に焦点を当てて——

鎌田由美子・松田 安 弘・山下 暢 子

群馬パース大学紀要第15号別刷

2013年 3 月

原著論文

教員による2年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究

——看護学実習における教授活動に焦点を当てて——

鎌田由美子¹⁾・松田安弘²⁾・山下暢子²⁾Grasp of the Readiness of Students of a 2-year Nursing
Diploma Course by Nursing Teachers Members

——Focus on Teaching Activities in Clinical Nursing Practicum——

Yumiko KAMATA¹⁾, Yasuhiro MATSUDA²⁾, Nobuko YAMASHITA

要 旨

目 的：2年課程看護専門学校学生の看護学実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動を明らかにし、その特徴を考察する。

方 法：研究協力の承諾を得た114施設の教員576名を対象に、郵送法によるデータ収集を行った。測定用具には学生の実習に関わるレディネスを把握するための教授活動を問う質問紙と特性調査紙を用いた。その結果、390名(回収率67.7%)より回収でき、質問に回答した388名の記述を、Brelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の手法を用いて分析した。

結 果：2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握するために27カテゴリの教授活動を講じていることを明らかにした。また、それらの教授活動を通して、『看護実践に必要な知識や技術の修得状況を査定する』など、6つの特徴があることを示した。本研究の結果は、2年課程に在籍し、実習に関わる教員が学生のレディネスを把握するための基礎資料として活用可能である。

キーワード：2年課程看護専門学校、レディネス、看護学実習、教授活動

I. 緒 言

「教員は学生の実習に関わるレディネスをどのように把握しているのか」。本研究は、この疑問に答えることを目的とする。

レディネスとは、学習者の学習課題に対する身体的・精神的・社会的成熟、既習の知識・技術・態度と経験に関わる準備状態^{1,2)}である。学習者の学習課題に対する準備状態が整ったとき、すなわち、一定のレディネスが成立したとき、学習は最も効果的、能率的に行われる³⁾。教員は、学習者が効果的、能率的に学習を行うことを支援するという役割を持つため、学習者のレディネスを十分に把握し、そのレディネスに応じた教

授活動を展開する必要がある。

2年課程看護専門学校学生（以下2年課程学生と略す）は、准看護師の免許を取得しており⁴⁾、実習に関わる学生個々のレディネスは、准看護師養成所在学中に習得した知識・技術や准看護師としての就労経験により様々である^{5,6)}。これは、2年課程学生が、准看護師養成所在学中の学習経験や准看護師としての就労経験を学習資源の1つとして学習している可能性が高いことを示す。また、教員が学生個々に異なる准看護師養成所在学中の学習経験や准看護師としての就労経験を含めてレディネスを把握し、それに応じた教授活動を展開する必要があることを示す。

現在、2年課程学生のレディネスを把握するための

1) 群馬バース大学保健科学部看護学科

2) 群馬県立県民健康科学大学看護学部

研究が、看護技術習得状況⁷⁻⁹⁾や看護技術を習得していく経験¹⁰⁾、准看護師としての就労経験による学習への影響¹¹⁻¹⁴⁾などの側面から実施されている。また、2件の研究が、2年課程看護専門学校教員（以下2年課程教員と略す）の多くが、実習における教授活動に困難を感じており、特に、様々な教授技術を活用しながら、系統立てて指導を行うことが難しいと知覚している^{15,16)}ことを示した。しかし、これらは、2年課程学生の実習に関わる個々のレディネスを把握するための教授活動を網羅していない。

以上を背景とする本研究は、2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動を明らかにすることを目指す。この研究成果は、2年課程に在籍し、実習に携わる教員が、学生のレディネスを把握するための基礎資料となる。また、教員個々が学生のレディネスの把握に関わる日々の教授活動を自己評価するための指標としても活用可能である。

II. 研究目的

2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動を明らかにし、その特徴を考察する。

III. 用語の定義

1. 2年課程看護専門学校

(2-year nursing diploma course)

2年課程看護専門学校とは、准看護師免許を得た後3年以上業務に従事している准看護師又は高等学校若しくは中等教育学校を卒業している准看護師であることを入学又は入所の資格とする¹⁷⁾看護専門学校を指す。

2. 看護学実習 (clinical nursing practicum)

看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目ざす授業¹⁸⁾を指す。

3. レディネス (readiness)

レディネスとは、学習者の学習課題に対する身体

的・精神的・知的・社会的成熟、既習の知識・技術・態度と経験に関わる準備状態である。また、学習者のレディネスの成立と学習者のレディネスに応じた教授活動は、効果的・能率的な学習を導く。

IV. 研究方法

1. 研究対象

全国の2年課程看護専門学校208校に所属し、看護学実習を担当している教員を対象とした。

2. 測定用具

測定用具は、本研究において作成した「学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を問う質問紙」と、「対象者の特性調査紙」の2種類を用いた。「学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を問う質問紙」は、自由回答式質問とした。また、「対象者の特性調査紙」は、年齢、性別の他、教員としての経験年数や所属学校の設置主体など、対象者の人口統計学的特性を問う選択式質問と実数記入式質問から構成された。

2種類の測定用具の内容的妥当性は、専門家会議とパイロットスタディにより確保した。専門家会議には、2年課程学校の実習を担当している教員3名、Brelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の手法を用いた研究経験を持つ看護学研究者1名が出席し、回答の容易さ、文章表現の適切さなどを検討した。この結果を基に修正した質問紙を使用し、便宜的に抽出した2年課程教員30名を対象にパイロットスタディを実施した。パイロットスタディによる検討事項は、各質問に対する回答とともに、回答の容易さ、理解しやすさなどである。パイロットスタディを基に検討した結果、修正することなくパイロットスタディに用いた質問紙を本調査に使用することとした。

3. データ収集

2年課程看護専門学校208施設の教育管理責任者宛に、往復はがきを用いて研究協力を依頼した。そのうち研究協力の承諾が得られた114施設の実習を担当している教員を対象に、「学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を問う質問紙」、「対象者の特性調査紙」、返信用封筒を送付し、回収した。

4. データ収集期間

データ収集期間は、2011年5月16日から6月17日であった。

5. データ分析

- (1) 学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を問う質問への回答の分析

学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を問う質問に対して対象者が記述した回答内容の分析には、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法¹⁹⁾を用い、次の5段階を経た。

第1段階は、「研究のための問い」を「教員は学生の実習に関わるレディネスを把握するためにどのような教授活動をしているのか」と決定した。また「問いに対する回答文」を「教員は学生の実習に関わるレディネスを把握するために（ ）という教授活動を講じている」と決定した。

第2段階は、各対象者の自由回答式質問に対する記述全体を文脈単位とし、文脈単位を「研究の問い」の「教員は学生の実習に関わるレディネスを把握するために（ ）という教授活動を講じている」に対する回答の1つのみを含むよう記録単位へと分割した。

第3段階の基礎分析では表現が完全に一致している記録単位、表現が少し異なるが完全に意味が一致している記録単位を分類・整理し、記録単位群を作成し、これに命名した。

第4段階の本分析では、基礎分析により作成された同一記録単位群個々を、その意味内容の類似性によりさらに集約し、その類似性を的確に表す用語に置き換え、カテゴリを形成した。また、各カテゴリに含まれた記録単位の出現頻度を数量化し、カテゴリごとに集計した。

第5段階では、カテゴリの信頼性を確保するために、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法を用いた研究経験を持つ看護学研究者2名におけるカテゴリへの分類の一致率を Scott, W.A. の式²⁰⁾に基づき算出し、検討した。また、信頼性を確保しているかを判断するための基準を70%以上とした。

- (2) 教員特性を問う質問への回答分析

教員特性を問う質問への回答の分析には、統計ソフト SPSS[®] Statistics17.0 for Windows を用い、記述

統計値（度数、平均値、標準偏差、百分率）を算出した。

6. 倫理的配慮

研究対象者に研究目的、研究の意義、調査の必要性、倫理的配慮、返送方法、研究の公表方法を明記した依頼状を、質問紙と返送用封筒に添付し送付した。また、無記名により返信用封筒を個別に投函するように依頼した。さらに、回答内容を分析する際には、統計的处理およびデータのコード化、記号化を行った。このような手続きを通して、対象者の匿名性と自己決定の権利を保障した。

なお、本研究は、群馬県立県民健康科学大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 結 果

研究協力の承諾が得られた114施設に所属する実習を担当している教員576名に質問紙を送付し、390名(回収率67.7%)より回答を得た。このうち、「学生の看護学実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動」を問う自由回答式質問に回答した388名の回答を有効回答とし、分析対象とした。

1. 対象者の特性

対象となった2年課程教員の年齢は、30歳から60歳の範囲であり、平均46.2歳であった。看護教員養成課程研修受講状況は、14.2%にあたる55名が未受講であった。また、卒業した看護基礎教育課程や教員経験年数、所属する学校の所在地や設置主体などは多様であった(表1)。

2. 2年課程看護専門学校教員が学生の看護学実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動

対象者388名の記述は、1515記録単位、388文脈単位に分割できた。対象者1名あたりの記録単位数は、1記録単位から29記録単位の範囲であり平均3.9記録単位であった。

この1515記録単位のうち、675記録単位は、「対象者の思考や心情」「実習指導の方法」「形成的評価」など、学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を表してはいなかった。また、219記録単位は、抽象的かつ意味不明であった。そこで、これ

表 1 対象者の特性

n = 388

特性項目	項目の範囲・種類および度数			
教員経験年数	平均教員経験年数	9.8年（SD6.4）	15年以上20年未満	60名（15.5%）
	1年以上5年以上	94名（24.2%）	20年以上	32名（8.3%）
	5年以上10年未満	108名（27.8%）	不明	7名（1.8%）
	10年以上15年未満	87名（22.4%）		
所属する学校の教育課程	2年課程全日制	155名（40.0%）	2年課程通信制	7名（1.8%）
	2年課程定時制	222名（57.2%）	不明	4名（1.0%）
所属する学校の設置主体	都道府県・市町村	95名（24.5%）	医師会	187名（48.2%）
	学校法人	23名（5.9%）	その他	27名（6.9%）
	公益法人・医療法人・社会福祉法人	56名（14.5%）		
所属する学校の所在地	北海道	21名（5.4%）	東海・北陸	23名（5.9%）
	東北	34名（8.7%）	近畿	38名（9.8%）
	東京	13名（3.4%）	中国・四国	73名（18.8%）
	関東・甲信越	103名（26.6%）	九州・沖縄	83名（21.4%）
卒業した看護基礎教育課程	大学	18名（4.6%）	専門学校（3年課程）	209名（53.9%）
	短期大学（3年課程）	39名（10.1%）	専門学校（2年課程）	111名（28.6%）
	短期大学（2年課程）	11名（2.8%）		
看護教員養成課程研修の受講状況	受講	330名（85.1%）		
	未受講	55名（14.2%）		
	不明	3名（0.7%）		
臨床経験年数	平均臨床経験年数	12.4年（SD6.3）	10年以上15年未満	128名（33.2%）
	1年以上5年未満	7名（24.2%）	15年以上20年未満	61名（15.7%）
	5年以上10年未満	134名（34.7%）	20年以上	58名（14.6%）
年齢	平均年齢	46.2年（SD7.2）	45歳以上50歳未満	93名（24.0%）
	30歳以上35歳未満	24名（6.2%）	50歳以上55歳未満	84名（21.7%）
	35歳以上40歳未満	45名（11.6%）	55歳以上	51名（13.1%）
	40歳以上45歳未満	84名（21.6%）	不明	7名（1.8%）
性別	男性	15名（3.9%）	女性	373名（96.1%）

ら675記録単位を除く840記録単位を分析対象とした。

840記録単位を意味内容の類似性に基づき分類した結果、2年課程教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動を表す27カテゴリが形成された（表2）。

以下、これらのうち、記録単位数の多いものから順に結果を論述する。なお【 】内は、カテゴリを表し、〔 〕内は、各カテゴリを形成した記録単位数に占める割合を示す。また、各カテゴリを形成した代表的な記述を用いて各カテゴリを説明する。

【1. 社会的背景について情報を収集する】
〔150記録単位：17.9%〕
このカテゴリは、「各学年の担任が面接した面接記録から社会的背景を把握する。」「指導要録から最終学歴を確認する。」「実習前に職歴について確認する。」などの記述から形成された。

【2. 様々な手段を用いて学生個々の問題について情報を得る】
〔111記録単位：13.2%〕

このカテゴリは、「前回の実習場での課題など教員会等の情報交換の場から学生個々の実習上の問題を把握する。」「前回までの実習で何か障害があったのかを確認する。」「実習前に学習に専念できる状況かを本人から情報収集する。」などの記述から形成された。

【3. 当該実習に関わる過去の経験を聞く】
〔86記録単位：10.2%〕

このカテゴリは、「准看護師養成所在学時の実習経験を聞く。」「准看護師養成所における実習状況を聞く。」「今までの実習で経験したことをコミュニケーションの中で意図的に聞く。」などの記述から形成された。

【4. 事前学習の成果や試験の結果から既習の知識・技術の修得状況を確認する】
〔86記録単位：10.2%〕

このカテゴリは、「実習前に事前学習ノートにより既

表2 カテゴリーと記録単位数 n = 844

カテゴリー名	記録単位数
1. 社会的背景について情報を収集する	150 (17.8%)
2. 様々な手段を用いて学生個々の問題について情報を得る	111 (13.2%)
3. 事前学習の成果や試験の結果から既習の知識・技術の修得状況を確認する	86 (10.2%)
4. 当該実習に関わる過去の経験を聞く	86 (10.2%)
5. 身体的・精神的健康状態を確認する	66 (7.8%)
6. 学生の成績を確認する	47 (5.6%)
7. 他の教員から前回の実習内容を聞く	44 (5.3%)
8. 事前学習の実施状況を確認する	34 (4.0%)
9. 必要に応じて気になる学生と話をする	32 (3.8%)
10. 学生個々の学習課題とその克服方法を本人に聞く	31 (3.7%)
11. 気になる学生について情報を得る	28 (3.3%)
12. 学生個々の学習目標を確認する	25 (3.0%)
13. 実習に対する不安を事前に確認する	25 (3.0%)
14. 学生との会話や記録物から実習に対する意欲を確認する	12 (1.4%)
15. 過去の看護過程展開状況について情報を得る	11 (1.3%)
16. 他の教員から学生個々の実習態度について情報を得る	8 (0.9%)
17. 既習の学習内容を確認する	8 (0.9%)
18. 学生や教員の記録物から過去の実習目標の達成状況を確認する	7 (0.8%)
19. 学生の言動や身だしなみを観察する	7 (0.8%)
20. 学生の記録物から文章表現能力を確認する	6 (0.7%)
21. 事前学習の成果から実習に必要な自己学習状況を確認する	6 (0.7%)
22. コミュニケーション能力を確認する	4 (0.5%)
23. 実習目標の理解状況を確認する	4 (0.5%)
24. 過去に遭遇した問題への対処能力を確認する	2 (0.2%)
25. 実習前に基礎学力を確認する	2 (0.2%)
26. 実習目標達成のための学習計画を聞く	1 (0.1%)
27. 演習時に器用さを確認する	1 (0.1%)
記録単位総数	844 (100%)

習の知識の程度を確認する。」「事前学習の内容から知識の修得状況を把握する。」「実習前に技術試験を行う。」などの記述から形成された。

【5. 身体的・精神的健康状態を確認する】
〔66記録単位：7.9%〕
このカテゴリーは、「実習中は学校で作成した健康状態のチェック表を使用して毎日の体調を確認する。」「実習中の身体の状態を観察する。」「更衣室で毎朝、体温測定を実施する。」などの記述から形成された。

【6. 学生の成績を確認する】〔47記録単位：5.6%〕
このカテゴリーは、「成績一覧で情報を得る。」「実習前までの成績を把握する。」「個人の指導要録を読んで成績を把握する。」などの記述から形成された。

【7. 他の教員から前回の実習内容を聞く】
〔44記録単位：5.2%〕
このカテゴリーは、「実習前に学生の今までの実習内容を担当教員から聞く。」「前回実習担当した教員から実習状況を聞く。」「今までの実習状況を他の教員と情報交換する。」などの記述から形成された。

【8. 事前学習の実施状況を確認する】

〔34記録単位：4.1%〕

このカテゴリは、「実習前に事前学習の内容について確認する。」「実習前の実習目標提出時に事前学習の内容について確認する。」「実習前に課題として出した事前学習を提出してもらい、1人1人確認する。」などの記述から形成された。

【9. 必要に応じて気になる学生と話をする】

〔32記録単位：3.8%〕

このカテゴリは、「気になる学生に実習状況を聞く。」「学内実習で気になる学生とは、実習前に個人面談する。」「実習に対して不安が強そうな学生に対して事前に面接する。」などの記述から形成された。

【10. 学生個々の学習課題とその克服方法を本人に聞く】

〔31記録単位：3.7%〕

このカテゴリは、「実習前に学生に自己の課題を確認する。」「実習開始前に学生1人1人に、前回の実習での自己の課題について聞く。」「実習前に実習に向けての課題に対する対策を学生に対してアンケートを行う。」などの記述から形成された。

【11. 気になる学生について他の教員から情報を得る】

〔28記録単位：3.3%〕

このカテゴリは、「特に気になる学生については他の教員から情報を得る。」「気になる学生について他の教員と報告しあっているので、そこから情報を得る。」「問題とあがっていた学生については、前回担当した教員から実習状況を教えてもらう。」などの記述から形成された。

【12. 学生個々の学習目標を確認する】

〔25記録単位：3.0%〕

このカテゴリは、「実習前に学生個々の目標を確認する。」「実習に向けての個人目標を実習開始前に確認する。」「実習初日に実習に対する個人目標を確認するために意図的に質問する。」などの記述から形成された。

【13. 実習に対する不安を事前に確認する】

〔25記録単位：3.0%〕

このカテゴリは、「不安に思うことを実習開始前に把握する。」「実習前に事前アンケートを行い、実習に対しての不安を確認する。」「実習に向けて、どの程度の不安を持っているかアンケートにより調査する。」などの記述から形成された。

【14. 学生との会話や記録物から実習に対する意欲を確認する】

〔12記録単位：1.4%〕

このカテゴリは、「実習に対する意欲を確認する。」

「意欲的かどうかについて実習指導簿を見て把握する。」「実習に対する意欲をレポートで確認する。」などの記述から形成された。

【15. 過去の看護過程展開状況について情報を得る】

〔11記録単位：1.3%〕

このカテゴリは、「看護過程の展開状況について実習指導簿を見て把握する。」「前回担当だった教員から看護過程の展開状況についての情報を得る。」「実習前に看護過程の演習での状況を担当教員より聞く。」などの記述から形成された。

【16. 他の教員から学生個々の実習態度について情報を得る】

〔8記録単位：1.0%〕

このカテゴリは、「今までの実習担当教員から学生の実習態度について情報を得る。」「今までの実習で態度について問題がないかを他の教員から情報を得る。」「他の領域担当教員よりレポートの提出状況について情報収集する。」などの記述から形成された。

【17. 既習の学習内容を確認する】

〔8記録単位：1.0%〕

このカテゴリは、「これまでの学習内容をシラバスで確認する。」「専任教員や外部講師の資料などに目を通す。」「実習の各領域に関係する科目のシラバスを確認する。」などの記述から形成された。

【18. 学生の言動や身だしなみを観察する】

〔7記録単位：0.8%〕

このカテゴリは、「学生の言動を観察する。」「学生と関わる際に意識して、言葉遣いを観察する。」「服装、髪の毛の色、爪、ひげなどのチェックを行う。」などの記述から形成された。

【19. 学生の記録物から文章表現能力を確認する】

〔6記録単位：0.7%〕

このカテゴリは、「実習前に事前学習で提出されたものを確認し、文章表現能力を把握する。」「実習中に実習記録から文章表現能力を把握する。」「事前学習課題に対して、どのようにまとめられているかを確認する。」などの記述から形成された。

【20. 事前学習の成果から実習に必要な自己学習状況を確認する】

〔6記録単位：0.7%〕

このカテゴリは、「受け持ち患者の事例に必要な知識面を事前学習ノートで確認する。」「受け持ち患者について自己学習を実習前に行い、実習に臨もうとしているか確認する。」「受け持ち患者の事例に必要な知識について確認する。」などの記述から形成された。

【21. コミュニケーション能力を確認する】

〔4 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「コミュニケーション能力をみる。」
「学生個々のコミュニケーション能力は、学校内での
様子で把握する。」などの記述から形成された。

【22. 実習目標の理解状況を確認する】

〔4 記録単位：0.5%〕

このカテゴリは、「実習前に実習目標をどのように理
解したか確認する。」「実習の目的・目標について把握
しているか本人に確認する。」などの記述から形成され
た。

【23. 他の教員や実習評価表から過去の実習目標の達
成状況を確認する】

〔3 記録単位：0.4%〕

このカテゴリは、「教員会での情報交換をとおり、他
の教員から学生個々の実習上の目標達成状況について
確認する。」「今までの実習での学生個々の目標達成状
況について他の教員から情報を得る。」などの記述から
形成された。

【24. 過去に遭遇した問題への対処能力を確認する】

〔2 記録単位：0.2%〕

このカテゴリは、「精神的な問題が生じた時の対処方
法を確認する。」「前回までの実習での障害をどのよう
に対処したかを確認する。」の記述から形成された。

【25. 実習前に基礎学力を確認する】

〔2 記録単位：0.2%〕

このカテゴリは、「実習に入る前に高校での基礎学力
が身についているか確認する。」「実習に入る前に准看
護科での基礎学力が身についているか確認する。」の記
述から形成された。

【26. 実習目標達成のための学習計画を聞く】

〔1 記録単位：0.1%〕

このカテゴリは、「実習前に目標達成のために、どん
な学習をするか学生に聞いて発表してもらう。」の記述
から形成された。

【27. 実習前の学内演習時に器用さを確認する】

〔1 記録単位：0.1%〕

このカテゴリは、「実習前の学内演習の実際では器
用、不器用をみる。」の記述から形成された。

3. カテゴリの信頼性

カテゴリの一致率は、97.7%、94.2%であった。こ
れらは、本研究が明らかにした27カテゴリが信頼性を
確保していることを示す。

VI. 考 察

本項は、第1に、本研究のデータの適切性について
確認し、第2に、2年課程学生の実習に関わるレディ
ネスを把握するために講じている教員の教授活動の特
徴を考察する。

1. データの適切性

2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握する
ために講じている教員の教授活動を解明するには、可
能な限り多様なデータを収集する必要があり、全国の
2年課程学校に所属する教員を対象とした悉皆調査を
実施した。また、悉皆調査により協力の得られた対象
者には、教員経験年数および所属する学校の教育課程
が多様な教員を含んでおり、明らかになった27カテ
ゴリが、2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握
するために講じている教授活動を網羅している可能性
があることを示唆する。そこで、これを前提とし考察
を進める。

2. 2年課程看護専門学校学生の看護学実習に関わる
レディネスを把握するために講じている教員の教
授活動の特徴

本研究の結果は、2年課程学生の実習に関わるレ
ディネスを把握するために講じている教員の教授活動
を表す27カテゴリ、すなわち27種類の教授活動を明ら
かにした。

これら27種類の教授活動の特徴を明らかにするた
めに、第1に着目したカテゴリは、【6. 学生の成績を確認
する】である。【6】に示す「成績」²¹⁾とは、学習者
の各教科の学習成果を評点、記号、あるいは評語で表
現したものである。また、評価論的には総括的評価に
該当し、一定期間内に実施された授業の目標への到達
度を表現したものである。保健師助産師看護師学校養
成所指定規則²²⁾が示す教育内容は、科学的思考の基盤
などの基礎分野、人体の構造と機能などの専門基礎分
野、基礎看護学などの専門分野、在宅看護論などの統
合分野から構成されている。これらの教育内容は、看
護実践に必要な知識・技術の修得を目標に設定されて
いる。看護専門学校は、指定規則に基づき教育課程を
編成し、指定規則に示された教育内容に関連する授業
を学生に提供している。これらは、授業の目標への到
達度を表現する成績が、看護実践に必要な知識・技術
の修得状況を表していることを意味する。これに関連

して、【23. 他の教員や実習評価表から過去の実習目標の達成状況を確認する】に着目した。実習は、看護実践能力の習得を目ざす授業である。これは、【23】に示す「過去の実習目標の達成状況」が、実習による看護実践能力の習得状況、すなわち、看護実践に必要な知識・技術の修得状況の一部を表していることを示す。これらは、【6】【23】が、学生の看護実践に必要な知識・技術の修得状況を把握するために講じている教授活動であることを示す。

これに関連して着目したカテゴリは、【4. 事前学習の成果や試験の結果から既習の知識・技術の修得状況を確認する】である。看護学実習は、学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目ざす授業²³⁾である。これは、【4】に示す学生の「既習の知識や技術の修得状況」が、クライアントとの相互行為や実習目標の達成に影響するとともに、教員がそれらの修得状況に応じて教授活動を展開することの重要性を示唆する。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【6】【23】【4】を通して、〈看護実践に必要な知識や技術の修得状況を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

第2に着目したカテゴリは、【15. 過去の看護過程展開状況について情報を得る】である。看護過程²⁴⁾とは、クライアントのもつ健康問題を解決に導く実践のプロセスであり、方法論としての問題解決法である。また、看護過程には、アセスメント、問題の明確化、計画立案、実施、評価という一連のプロセスがある²⁵⁾。先述したように、実習は、学生が実習目標の達成を目ざす過程において、看護目標達成に向けたクライアントとの相互行為が必要不可欠である。看護目標の達成に向けたクライアントとの相互行為は、看護過程の展開そのものであり、たとえ学生が既習の知識や技術を確実に習得していたとしても、看護過程を展開できなければ実習目標の達成は困難となる。これらは、教員が実習目標達成の支援に向けて、学生の過去の看護過程展開状況に関する情報を収集する必然性を示す。

これに関連して着目したカテゴリは、【24. 過去に遭遇した問題への対処能力を確認する】である。看護過程の一連のプロセスのうち、問題の明確化は、クライアントのもつ健康問題を明らかにし、その問題の解決を目ざす計画立案と実施につながる。先述したように、

看護過程は、クライアントのもつ健康問題に対処し、解決へと導く方法論であり、【24】に示す「問題への対処能力」は、看護過程の展開に必要不可欠である。これらは、学生の問題への対処能力が円滑な看護過程展開の促進に影響することを示す。

これに関連して、【25. 基礎学力を確認する】と【19. 学生の記録物から文章表現能力を確認する】の2カテゴリに着目した。基礎学力とは、学習により獲得される能力を学力とした場合、その学力を形成する基礎になる必須の部分、すなわち最低必要量を構成する能力²⁶⁾であり、一般的に読み・書き・計算に関連する能力をいう。学生は、クライアントの看護目標の達成に向けて看護過程を展開する際、看護記録や文献などを読み、自己の思考や実践内容を整理したり、時には計算したりして、それらを文字にして実習記録に表現する。これらは、学生の基礎学力や文章表現能力が看護過程展開の促進に影響することを示す。

これらに関連して着目したカテゴリは、【18. 学生の言動や身だしなみを観察する】である。実習において、看護の対象となるクライアントは、実習目標の達成に向けた学習活動に必要不可欠な存在である。しかし、クライアントは、専門職者が提供する治療や看護を受けることを目的に病院や福祉施設などのサービスを利用しており、学生の学習活動の協力を目的としてそれを利用している訳ではない。先行研究²⁷⁾は、クライアントから快く受け止められる学生がいる一方、拒否や拒絶される学生も存在することを明らかにした。人間は、対人的・集団的・社会的状況において、安定し一般的に受容されている習慣的な行動様式や行動的特徴を発達させていく²⁸⁾。このような行動様式や行動的特徴を社会性という。【18】に示す「学生の言動や身だしなみ」は、学生の社会性を表す行動的特徴の一つである。これらは、「学生の言動や身だしなみ」が、クライアントからの受容に関連する学生の行動的特徴であり、看護過程展開に関わるクライアントとの相互行為に影響することを示す。これに関連して【21. コミュニケーション能力を確認する】のカテゴリに着目した。相互行為は、人間と環境、ならびに人間と人間の知覚とコミュニケーションのプロセスである²⁹⁾。学生は、クライアントの反応を知覚し、コミュニケーションを通してクライアントと相互行為を展開する。これらは、学生のコミュニケーション能力が、看護過程展開に関わるクライアントとの相互行為に影響することを示す。また、これに関連して【27. 実習前の学内演習時

に器用さを確認する】のカテゴリに着目した。【27】に示す「学内演習」とは、学内に実践の場を想定し、それを活用して、クライアントへの直接的な看護に必要な技術習得を目ざして用いられる授業形態³⁰⁾を意味する。【27】は、教員が、クライアントへの直接的な看護に必要な技術に学生の器用さが影響すると認識し、学内演習時にそれを確認していることを表す。器用とは、一般的に、手先がよくきき、技芸に巧みなこと、細かい仕事を上手く処理することをいう。また、不器用とは、上手に仕上げる技術のないこと、技のつたないことをいう。学生は、技術を介してクライアントと相互行為を展開する。これらは、学生の器用さが、看護過程展開に関わるクライアントとの相互行為に影響することを示す。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【15】【24】【25】【19】【18】【21】【27】を通して、〈看護過程展開の促進に影響する学生の能力と行動的特徴を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

第3に着目したカテゴリは、【7. 他の教員から前回の実習内容を聞く】である。学生は、これまでの実習で受け持った患者の健康問題や実施した援助、施設の備品の使用方法など、過去の実習経験を活かしながら実習を進める。そのため、教員は、当該実習以前に実習を担当していた他の教員から、学生がどのようなクライアントを受け持ったのか、そのクライアントにどのような援助を行ったのかなど、学生が経験した実習内容を尋ね、その情報を参考にして教授方略を検討する。これらは、【7】が他の教員から前回の実習内容に関する情報を得ることを通して、自己の教授活動に活用できる学生の実習経験を把握していることを示す。

これに関連して着目したカテゴリは、【3. 当該実習に関わる過去の経験を聞く】と【17. 既習の学習内容を確認する】である。2年課程の学生は、准看護師免許を取得しており³¹⁾、学生の多くが准看護師として就労しながら学業を継続している。これは、【3】に示す「当該実習に関わる過去の経験」、【17】に示す「既習の学習内容」の中に、准看護師としての実務経験や准看護師養成所在学時の学習内容が含まれていることを意味する。学生が准看護師養成所在学時に学習する授業科目の構成や授業形態³²⁾は、在宅看護論実習を除き2年課程学校のそれと同様である。また、クライアントを受け持ち、援助するという実習方法も同様である。先行研究^{33,34)}は、2年課程学生が、准看護師養成所在

学中や就労中に、全身清拭やおむつ交換を経験しており、その経験を次の学習に活用していることを明らかにした。また、先行研究³⁵⁾は、学生が実習中に、既習の学習内容や過去の実習経験などを学習資源として活用し、学習や看護の機会を獲得しようとすることを明らかにした。これらは、学生が既習の学習内容や過去の経験を学習資源として活用し、実習を進めていることを示す。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【7】【3】【17】を通して、〈活用できる学生の学習資源の有無と内容を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

第4に着目したカテゴリは、【2. 様々な手段を用いて学生個々の問題について情報を得る】【9. 必要に応じて気になる学生と話をする】【11. 気になる学生について他の教員から情報を得る】である。本研究の対象者である教員が、様々な手段を用いて情報を得ていた【2】の「学生個々の問題」とは、前回の実習で生じた問題や障害、実習に専念できない状況などであった。また、【9】【11】の「気になる学生」とは、不安が強い学生、表情がすぐれない学生、課題提出が滞っている学生などであった。実習は、学生・教員・クライアントの3者を中心に、それぞれに他の医療従事者、学生、家族が複雑に関係しあうことを必然とする授業³⁶⁾である。学生は、このような特徴を持つ授業の過程において、不安や緊張感を抱きながら相互行為を展開し、時には困難に直面し、学習を停滞させる³⁷⁾。これは、実習が講義や演習とは異なる状況下で行われることに起因し、学生にとって、直面する様々な困難を乗り越えながら学習を継続していかなければならない授業であることを示す。先述した「学生個々の問題」や「気になる学生」が表す内容は、実習期間中の学習継続を阻害する要因となりうる。これらは、【2】【9】【11】が、何らかの問題を抱えている学生や気になる学生の実習期間中の学習継続の可否を懸念した教員の教授活動であることを示す。これらに関連して、【5. 身体的・精神的健康状態を確認する】と【13. 実習に対する不安を事前に確認する】のカテゴリに着目した。【5】に示す学生の「身体的・精神的健康状態」や【13】に示す「実習に対する不安」もまた実習期間中の学習継続を阻害する要因となりうる。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【2】【9】【11】【5】【13】を通して、〈実習期間中の学習継続を阻害する要

因の有無と程度を査定する」という特徴を持つことを示唆する。

第5に着目したカテゴリは、【1. 社会的背景について情報を収集する】である。教員が収集した社会的背景とは、臨床経験、家族背景、学歴、経済状況、勤務状況などであった。

この社会的背景のうち、「臨床経験」は、准看護師としての就労施設、勤務病棟、臨床経験年数などを表しており、教員は、これらから学生が准看護師として経験している内容を把握していた。「家族背景」は、家族構成、婚姻状況、子供の有無、要介護者の有無を表しており、教員は、これらから学生の生活経験や育児経験、介護経験の把握をしていた。社会的背景のうち、「臨床経験」と「家族背景」を把握する教授活動は、先に考察したカテゴリ【3. 当該実習に関わる過去の経験を聞く】に該当する。これらは、カテゴリ【3】と同様に、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【1】を通して、〈活用できる学生の学習資源の有無と内容を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

また、社会的背景のうち、「学歴」は、出身高等学校や最終学歴などを表しており、教員は、これらから学生の学力を把握していた。社会的背景のうち、「学歴」を把握する教授活動は、先に考察したカテゴリ【25. 実習前に基礎学力を確認する】に該当する。これらは、カテゴリ【25】と同様に、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【1】を通して、〈看護過程展開の促進に影響する学生の能力と行動的特徴を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

さらに、社会的背景のうち、「経済状況」は、経済状況そのものを表しており、教員は、これらから学生の生活に影響するような経済的な問題の有無を把握していた。「勤務状況」は、実習中の勤務形態や夜勤の有無、休日出勤の有無などを表しており、教員は、これらから学生の学習に影響するような要因を把握していた。社会的背景のうち、「経済状況」と「勤務状況」を把握する教授活動は、先に考察したカテゴリ【2. 様々な手段を用いて学生個々の問題について情報を得る】

【11. 気になる学生について情報を得る】に該当する。これらは、カテゴリ【2】【11】と同様に、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【1】を通して、〈実習期間中の学習継続を阻害する要因の有無と程度を査定する〉という特徴を

持つことを示唆する。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【1】を通して、〈活用できる学生の学習資源の有無と内容を査定する〉〈看護過程展開の促進に影響する学生の能力と行動的特徴を査定する〉〈実習期間中の学習継続を阻害する要因の有無と程度を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

第6に着目したカテゴリは、【8. 事前学習の実施状況を確認する】【20. 事前学習の成果から実習に必要な自己学習状況を確認する】である。

先行研究^{38,39)}は、教員の多くが、実習前に当該実習に関する課題を提示し、事前学習を学生に求めていることを明らかにした。本研究の結果も、教員が事前学習として課題を提示し、その実施状況や成果を確認していることを明らかにした。教員が課題を提示する事前学習は、課題学習の一つである。課題学習⁴⁰⁾とは、学習過程における学生の経験を目的的で主体的なものにするために、特定の主題や課題の下に教材と学習活動を組織して展開する学習様式をいう。これは、課題学習の一つである事前学習が、学生の学習活動を主体的なものにすることを旨とした学習様式であり、この様式を用いた学習が、学生の主体性を要することを意味する。主体性⁴¹⁾とは、主体が他によって動かされるのではなく、みずからの自発的な判断や行為をすることをいう。学生の自己学習の実施状況に関する先行研究⁴²⁾は、教科書や参考図書を転記するだけの学生や、同級生が学習したレポートをそのまま写す学生がいる一方、多様な文献を活用し学習する学生もいることを明らかにした。これらは、教員が事前学習として課題を提示し、【8】【20】に示す「事前学習の実施状況」や「自己学習状況」を確認するという教授活動が、学生の主体性を把握するための教授活動であることを示す。これに関連して、【10. 学生個々の学習課題とその克服方法を本人に聞く】のカテゴリに着目した。【10】に示す「学生個々の学習課題」も「その克服方法」も、学生自身の自発的な判断や行為によって成立する。これは、先に示した学生の主体性を要する学習活動に相当し、【10】が学生の主体性を把握するための教授活動であることを示す。さらに、これに関連して、【12. 学生個々の学習目標を確認する】と【26. 実習目標達成のための学習計画を聞く】の2カテゴリに着目した。【12】に示す「学生個々の学習目標」や【26】に示す「実習目標達成のための学習計画」もまた、学生自身

の自発的な判断と行為によって設定される。学生が個々の学習目標を明確にし、学習計画を立案することは、主体的に学習を進めていこうとする学生の自発的な判断と行為の表れである。先行研究⁴³⁾は、課題の明確化や目標達成への決意が学生の主体性を表していることを明らかにした。これらは、「学生個々の学習目標」の明確化と「実習目標達成のための学習計画」の立案が、学生の主体性を表していることを意味し、【10】【12】【26】が、学生の主体性を把握するための教授活動であることを示す。

また、これらに関連して着目したカテゴリは、【14. 学生との会話や記録物から実習に対する意欲を確認する】である。【14】に示す「実習に対する意欲」とは、教育学において用いられる学習意欲に相等する。学習意欲⁴⁴⁾とは、自発的、能動的に学習しようとする欲求・意志のことであり、学習における意志決定の主体が自分自身であるという特性をもつ。これは、【14】が、学生との会話や記録物から、自発的、能動的に学習しようとする学生の主体性を確認していることを示す。これに関連して、【16. 他の教員から学生個々の実習態度について情報を得る】のカテゴリに着目した。先行研究⁴⁵⁾は、教員が、学生に対して、実習目標の達成に向けて自ら行動を起こす主体的な学習態度を求めていることを明らかにした。これらは、【14】【16】が、当該実習に先立ち、自発的、能動的、主体的に学習しようとする学生の主体性に関わる情報を得るという教授活動であり、先に考察したカテゴリ【8】【20】【12】【10】【26】と共通する教授活動であることを示す。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【8】【20】【12】【10】【26】【14】【16】を通して、〈学生の学習への主体性を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

最後に着目したカテゴリは、【22. 実習目標の理解状況を確認する】である。目標⁴⁶⁾とは、個体がそれに到達すべく行動しているところの対象であり、個体の動機づけに依存して、個体が到達した場合に欲求が満たされ、一つの衝動に基づく一連の行動が終わるような場所をいう。これは、目標が、そこに到達するように行動する対象であり、その行動の動機づけに影響することを意味する。実習目標は、学生が実習によって到達を目指す行動を表し、修得を目指す学習内容と修得を期待する程度を学習者の行動として具体的に表現される⁴⁷⁾。これらは、【22】に示す「実習目標の理解状況」が、学習内容の修得に向かう具体的な行動に対する学

生の動機づけの程度を表す。

以上は、教員が学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教授活動【22】を通して、〈学習内容の修得に向かう具体的な行動に対する学生の動機づけの程度を査定する〉という特徴を持つことを示唆する。

3. 2年課程看護専門学校学生の看護学実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動への示唆

2年課程学生のレディネスは多様である。そのため、教員は、学生のレディネスを把握する目的を見失い、その多様性に翻弄され、目的に関係なく当該授業の準備や展開に必要な学生情報を収集してしまう場合がある。

本研究の結果は、教員が27種類の2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握する教授活動を通して、6側面の査定をしていることを示した。これらは、何を目的とした教授活動であるのかを教員個々が認識し、必要となる学生情報に焦点を絞ってレディネスを把握する必要性を示唆する。

Ⅶ. 結 論

1. 2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動27種類の教授活動を明らかにした。
2. 2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握するために講じている教員の教授活動には、《看護実践に必要な知識や技術の修得状況を査定する》《看護過程展開の促進に影響する学生の能力と行動的特徴を査定する》《活用できる学生の学習資源の有無と内容を査定する》《実習期間中の学習継続を阻害する要因の有無と程度を査定する》《学生の学習への主体性を査定する》《学習内容の修得に向かう具体的な行動に対する学生の動機づけの程度を査定する》という6つの特徴がある。
3. 本研究の結果は、教員が2年課程学生の実習に関わるレディネスを把握する目的を教員個々が認識し、必要となる学生情報に焦点を絞ってレディネスを把握するための基礎資料として活用可能である。

謝 辞

本研究の結果は、全国の2年課程看護専門学校に所属する教員の方々から得られた貴重なデータに支えられている。データを提供して下さいった教員の皆様に深く感謝の意を表す。

引用文献

- 1) 日本教育者会学会：新教育社会学辞典，東洋館出版社，東京：1986：853-854.
- 2) 依田 新：新・教育心理学辞典，金子書房，東京：1997：788-789.
- 3) 前掲書2) 789.
- 4) 看護行政研究会編集：看護六法23年版，新日本法規出版，名古屋：2012：保健師助産師看護師学校指定規則，第4条2項，281.
- 5) 石束佳子，池西静江，前田恵美子ほか：看護婦2年課程入学時の基礎看護技術到達度，第24回日本看護学会論文集—看護教育—：1993：134-137.
- 6) 平元 泉，石井範子，堀井雅美ほか：看護婦学校2年課程における入学時の基礎看護技術の習得状況，秋田大学医療短期大学紀要，4：1996：87-93.
- 7) 前掲書5)
- 8) 前掲書6)
- 9) 鈴木せん，富岡美和，鬼沢和美ほか：2年課程看護学校における学生の清拭技術修得度の実態と課題，看護展望，26(8)：2001：106-111.
- 10) 吉田幸枝：看護技術修得過程における2年課程学生の経験，看護展望，34(8)：2009：47-51.
- 11) 三木隆子，柳澤眞由美，寺西範浩ほか：2年課程定時制看護専門学校生の看護学実習における学習活動の特性，第40回日本看護学会論文集—看護教育—：2009：83-85.
- 12) 加藤麻未：2年課程看護師養成学校における看護学生の自己受容に関する研究，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究論文集，(33)：2008：53-60.
- 13) 坂井恵子，山下美子，土肥真美恵：勤労看護学生の実習学年における実態調査，第22回日本看護学会論文集—看護教育—：1991：159-162.
- 14) 酒井千鶴子，倉田玲子，春木桂子：看護師2年課程における学生の准看護師経験の活用，第37回日本看護学会論文集—看護教育—：2006：255-257.
- 15) 小川妙子：看護学実習における教授活動に関する研究—2年課程専門学校の現状—，第27回日本看護学会論文集—看護教育—：1996：62-65.
- 16) 小川妙子，舟島なをみ：看護学実習における教授活動に関する研究—2年課程専門学校教員の特性と教授活動の関係—，看護教育学研究，6：1997：45-57.
- 17) 前掲書4) 281.
- 18) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学第4版増補版，医学書院，東京：2009：254.
- 19) 舟島なをみ：質的研究への挑戦第2版，医学書院，東京：2007：54-57.
- 20) Scott, W.A.: Reliability of Content Analysis; The Case of Nominal Scale Coding. Public Opinion Quarterly, 19: 1955: 321-325.
- 21) 東 洋，梅本堯夫，芝祐順ほか：現代教育評価事典，「学業成績」の項，金子書房，東京：1988：60-61.
- 22) 前掲書4) 78.
- 23) 前掲書18) 254.
- 24) 金井克子：わかる・使える看護過程，中央法規，東京：2002：10-12.
- 25) 前掲書24) 10-12.
- 26) 前掲書21)「基礎学力」の項，127-128.
- 27) 安東淳子，池田 栄，指宿えり子ほか：学生と患者との人間関係形成に影響を与える要因についての一考察，第21回日本看護学会集録—看護教育—：1990：116-119.
- 28) 古畑和孝：社会性とは，教育と医学，37(9)：1989：4-5.
- 29) 杉森みど里訳：キング看護理論，医学書院，東京：2008：180.
- 30) 宮芝智子，舟島なをみ：看護技術演習における学習の最適化に必要な教授活動の解明，看護教育学研究，17(1)：2008：8-21.
- 31) 前掲書4) 281.
- 32) 前掲書4) 第5条，70.
- 33) 前掲書9)
- 34) 川崎裕美，西山美香，埴田美代子：2年課程における基礎看護技術「排泄」の特徴，看護展望，19(12)：1994：82-86.
- 35) 山下暢子，定廣和香子，舟島なをみ：看護学実習における学生行動の概念化，看護教育学研究，12(1)：2003：15-28.
- 36) 前掲書18) 260.

- 37) 例えば次のような文献がある。
- ・藤崎資子，柴田恵子：交流分析理論で明らかにした臨地実習中に不安・ストレスがあった学生の対処方法，第39回日本看護学会論文集—看護教育—：2008：322-324.
 - ・丸谷美紀：療養者本人・家族・医療従事者間の気持ち・考えのずれに関する2年課程の看護学生の経験，第38回日本看護学会論文集—看護教育—：2007：39-41.
- 38) 大場良子：成人看護学実習における看護技術に関する事前学習の効果について，埼玉県立大学紀要，8：2006：91-96.
- 39) 深谷博子，足立典子，佐藤新子：老年実習での事前学習の活用方法，帝京平成看護短期大学紀要，(21)：2011：19-22.
- 40) 細谷俊夫他編：新教育大事典，「課題学習」の項，第一法規出版，東京：1990：454-455.
- 41) 森 宏一編：哲学辞典，「主体性」の項，青木書店，東京：2000：212.
- 42) 緒方妙子，坂井邦子，江島峰子：母性看護実習を充実させるための効果的な事前準備に関する検討，九州看護福祉大学紀要，10(1)：2007：31-39.
- 43) 新井清美，竹内久美子，木暮孝志：看護学生の主体性に関する文献研究，健康科学研究，(4)：2011：69-75.
- 44) 前掲書40) 352-353.
- 45) 細川満子，千葉敦子，山本春江ほか：教員が考える在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態度，青森保健大雑誌，9(2)：2008：159-166.
- 46) 下中弘編：哲学事典，平凡社，東京：1993：1393-1394.
- 47) 田島桂子：看護教育評価の基礎と実際，医学書院，東京：1992：32-35.

Summary

Objectives : This study aimed to ascertain teaching activities in a clinical nursing practicum that enable grasp of the readiness of students of a 2-year nursing diploma course and identify the activities characteristics.

Methods : A questionnaire was mailed to 576 curriculum coordinators at 114 institutions that consented to participate in the study. Responses were received from 390 curriculum coordinators (response rate, 67.7%) and the responses from 388 were analyzed using a content analysis method based on Brelson's methodology used in nursing education.

Results : Teaching activities in a clinical nursing practicum devised in order to grasp the readiness of students of 2-year nursing diploma course were classified into 27 categories, including "Information is collected on social background".

Conclusions : In order to grasp the readiness of students of 2-year nursing diploma course 27 teaching activity categories were devised for clinical nursing practicum Six Key features were identified. The acquisition situation of knowledge required for nursing practice or technology was assessed" The result of this research and clarification of clinical nursing practicum can be utilized by schools offering a 2-year nursing course nursing diploma course to grasp a student's readiness.

Key words : 2-year nursing diploma course, readiness, clinical nursing practicum, teaching activity